

—国内動向—

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向（令和7年7月）

【要約】

- 気温は、北・東・西日本でかなり高く、日本の月平均気温は7月として最も高かった。降水量は、北・東・西日本日本海側と北日本太平洋側でかなり少なかった。日照時間は、北・東・西日本でかなり多かった。
- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万4817トン、前年同月比99.0%、価格は1キログラム当たり291円、同102.1%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万4716トン、前年同月比100.8%、価格は1キログラム当たり264円、同98.5%となった。
- 前年同様に猛暑の中での生産であるが、今年はほぼ空梅雨の状態で猛暑となり、干ばつ傾向にある。しかしながら、同じ県内でも降雨のある地域とない地域があり、全品目が被害を受けているわけではない。

(1) 気象概況

上旬は、旬平均気温は、偏西風が平年よりも大きく北を流れたため暖かい空気に覆われやすく、平年差は、北日本で+5.2度、東日本で+3.9度、西日本で+3.7度となり、1946年の統計開始以降、7月上旬として1位の高温となった。旬間日照時間は、北日本太平洋側と東・西日本でかなり多く、北日本日本海側で多かった。特に西日本日本海側では、平年比247%と1961年の統計開始以降、7月上旬として最も多照となった。旬降水量は、西日本日本海側を中心に太平洋高気圧に覆われ、晴れの日が多く、特に東・西日本の日本海側では、1946年の統計開始以降、7月上旬として最も降水量が少なかった記録を更新した。一方、沖縄・奄美では、台風第4号や湿った空気などの影響で多かった。東海地方では4日頃、梅雨明けしたとみられる（速報値）。

中旬は、旬平均気温は、北・東・西日本では、暖かい空気に覆われやすかったことに加え、北日本を中心に南からの暖かい空気の流入もあり、北日本でかなり高く、東・西日本でも暖かい空気に覆われやすく、高かった。一方、沖縄・奄美では平年並で一部地域は湿った空気の影響で低い所もあった。旬間日照時間は、東北地方を中心に、前線や湿った空気の影響を受けにくかったほか、

太平洋高気圧の北への張り出しが強く、晴れの日が多かった北・東日本日本海側でかなり多く、北日本太平洋側では多かったが、沖縄・奄美はかなり少なかった。旬降水量は、北日本太平洋側と東日本日本海側では少なかった。太平洋側を中心に太平洋高気圧の縁を回る湿った空気の流れ込みや台風第5号の影響もあり、東・西日本太平洋側では、大雨となった所があった。また、沖縄・奄美では、熱帯低気圧や湿った空気などの影響で、曇りや雨の日が多かった。関東甲信地方、北陸地方と東北南部では18日頃に、東北部では19日頃に梅雨明けしたとみられる（速報値）。

下旬は、旬平均気温は、本州付近に張り出した太平洋高気圧の影響により、北・東・西日本は暖かい空気に覆われるとともに、晴れて顕著に気温が高い日が多く、日最高気温35度以上の猛暑日が続いた所も多かった。30日には兵庫県丹波市柏原で日最高気温が41.2度となり、全国の气象台等とアメダスにおける観測史上1位の高温を記録した。一方、沖縄・奄美では台風第7号、8号や湿った空気の影響を受けやすく低かった。平年差は、北日本で、1946年の統計開始以降、7月下旬として1位の高温となった。旬間日照時間は、東・西日本日本海側と北・東・西日本太平洋側でかなり多く、北日本日本海側で多かった。一方、沖縄・奄美ではかなり少なかった。平年比

は、東・西日本日本海側と東日本太平洋側で、1961年の統計開始以降、7月下旬として1位の多照となった。旬降水量は、北・東日本太平洋側と東・西日本日本海側でかなり少なく、平年比

も東日本および西日本日本海側で、1946年の統計開始以降、7月下旬として1位タイの少雨となった。一方、沖縄・奄美ではかなり多かった。旬別の平均気温、降水量、日照時間は図1の通り。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本					日本海側 太平洋側				
東日本					日本海側 太平洋側			日本海側 太平洋側	
西日本					日本海側 太平洋側				

資料：気象庁「7月の天候」

1 平年を上回る水準				2 平年並み				3 平年を下回る水準			
------------	--	--	--	--------	--	--	--	------------	--	--	--

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万4817トン、前年同月比99.0%、

価格は1キログラム当たり291円、同102.1%となった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（7月速報）

品 目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	104,817	99.0	85.7	291	102.1	114.6	287	292	294
だいこん	5,822	84.2	83.1	113	126.9	108.7	119	115	106
にんじん	4,293	84.9	78.9	214	118.3	123.0	208	224	211
はくさい	5,347	92.0	86.7	69	89.6	92.1	69	71	67
キャベツ類	15,212	97.8	93.5	82	106.8	97.5	82	81	84
ほうれんそう	712	94.6	83.7	729	104.0	112.5	669	739	789
ねぎ	3,209	95.3	95.8	357	106.4	96.2	369	368	338
レタス類	9,503	103.8	103.7	135	93.3	98.3	130	134	141
きゅうり	6,778	107.5	97.1	343	90.2	113.7	375	356	311
なす	3,489	115.2	106.2	408	104.5	110.8	437	415	383
トマト	5,934	92.0	84.8	410	113.3	117.7	394	415	420
ピーマン	1,723	86.0	84.4	575	130.4	125.0	543	581	601
さといも	72	71.8	53.2	566	114.8	125.1	478	576	643
ばれいしょ	3,955	108.3	92.5	119	46.9	59.9	108	109	146
たまねぎ	8,860	118.5	103.3	127	71.5	89.5	124	125	130

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」
注1：平年比は過去5カ年（令和2～6年）平均との比較
注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、堅調な動きとなり、高値で推移した前年を2割近く上回り、平年を2割以上上回った（図2）。

葉茎菜類は、ほうれんそうの価格が、下旬に向け入荷量が減少したことから上昇し、高値で推移した前年をやや上回り、平年を1割以上上回った（図3）。

果菜類は、ピーマンの価格が中旬以降上昇し、

前年を3割ほど上回り、平年を2割以上上回った（図4）。

土物類は、ばれいしょの価格が、九州産の残量が多く下旬に上昇したものの、暴騰とも言える高値だった前年を5割以上下回り、平年を4割ほど下回った（図5）。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

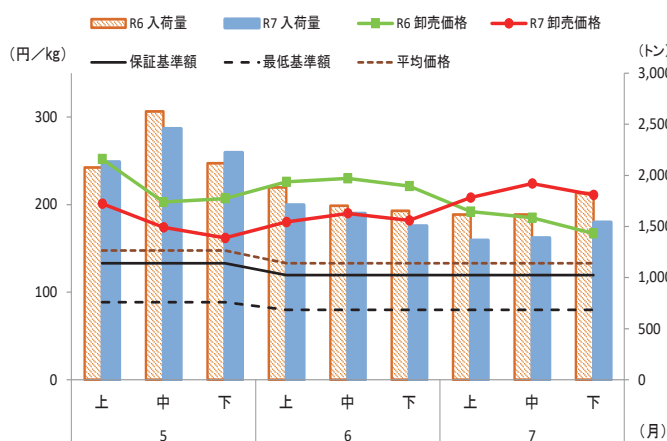


図3 ほうれんそうの入荷量と卸売価格の推移

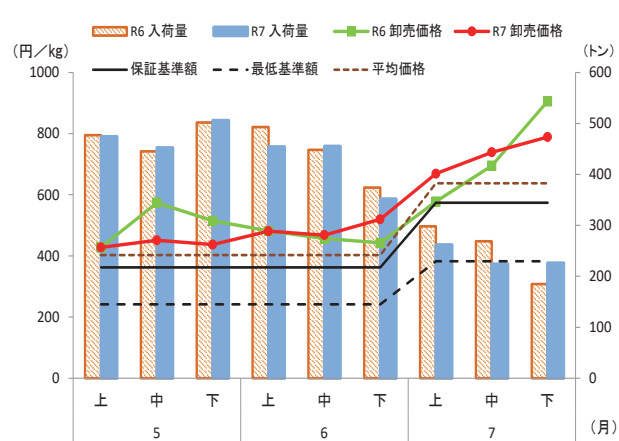


図4 ピーマンの入荷量と卸売価格の推移

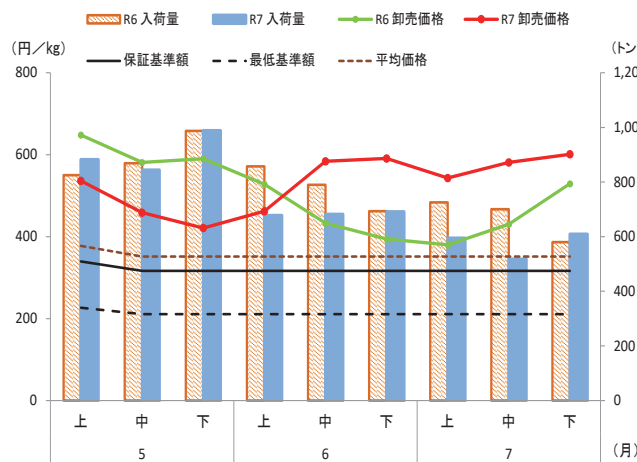
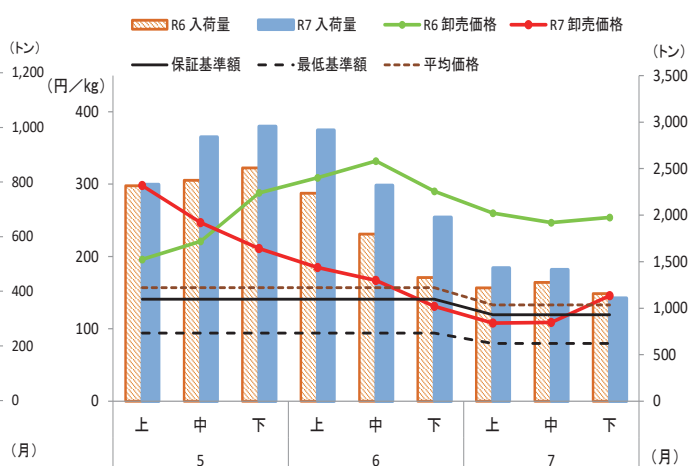


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、事業における過去6年間の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	7月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	北海道産、青森産中心の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、干ばつの影響が大きく、生育が停滞した。青森産の作付面積は前年並みで、気温の上昇で肥大は進んでいたが、干ばつの影響で生育が停滞した。総入荷量はやや少なかった前年、平年ともに2割近く下回った。 価格は、絶対量不足から堅調な動きが続き、安値で推移した前年を2割以上上回り、平年を1割近く上回った。
	にんじん 	青森産を中心に北海道産などの入荷があった。青森産の作付面積は前年並みで、干ばつの影響で肥大が進まず生育が停滞した。北海道産の作付面積は前年並みで、降雨の影響により、播種遅れからの干ばつ傾向の影響を受けて肥大が進まなかった。輸入の中国産は、前年を1割以上下回った。総入荷量は、少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割以上下回った。 価格は堅調な動きとなり、高値で推移した前年を2割近く上回り、平年を2割以上上回った。
葉茎菜類	はくさい 	長野産中心の入荷があった。作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育はおおむね順調だが、一部で軟腐病が散見されるほか、アブラムシの発生が平年より多い。総入荷量は、少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を1割以上下回った。 価格は、需要期ではないため、月間を通して大きな変動はなく、前年を1割以上下回り、平年を1割近く下回った。
	キャベツ類 	群馬産中心の入荷があった。作付面積は前年並みで、生育に若干の遅延が見られたものの、回復傾向にあり、適度な降雨に恵まれ生育は順調である。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は大きな動きなく、安値で推移した前年をかなりの程度上回ったものの、平年をわずかに下回った。
	ほうれんそう 	群馬産、栃木産中心の入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、一部で萎凋病 ^{いちょうびょう} が散見されるが、生育はおおむね順調である。栃木産の作付面積は前年並みで、病虫害は少なくおおむね順調だが、高温の影響により圃場間格差 ^{ほじょう} が見られる。総入荷量は、少なかった前年をやや下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、下旬に向け入荷量が減少したことから上昇し、高値で推移した前年をやや上回り、平年を1割以上上回った。
	ねぎ 	茨城産を中心に後続の東北産、北海道産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、高温の影響により肥大が悪く、局地的に降雨があり、品質低下が散見される。後続の東北産、北海道産は干ばつの影響が大きく、生育が停滞していたことから7～14日ほど遅延している。総入荷量は、前年、平年ともにやや下回った。 価格は、給食などの需要が無くなったことから、下旬に下がり、安値で推移した前年をかなりの程度上回ったものの、平年をやや下回った。
	レタス類 	長野産を中心に群馬産の入荷があった。長野産の作付面積は前年並みで、干ばつの影響によりばらつきが見られた生育は、天候に恵まれやや前進し、おおむね順調である。一部地域で、降雨や高温による軟腐病の発生が散見された。また、アザミウマなどの害虫の発生が平年より多い。群馬産の作付面積は前年並みで、生育初期の低温の影響は解消され、おおむね順調である。総入荷量は、前年並みであった前年をやや上回った。 価格は順調な入荷によりあまり変動がなく、やや高値で推移した前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。
果菜類	きゅうり 	福島産を中心に岩手産、秋田産など東北産中心の入荷があった。福島産の作付面積は前年並みで、5月の低温および日照不足による生育停滞と、6月の高温・乾燥による芯焼けが発生したものの、回復している。病虫害の発生が散見されている。岩手産の作付面積は前年並みで、若干の遅れが見られた生育は回復しおおむね順調だが、一部で虫害が散見される。秋田産の作付面積は前年並みで、降雨による定植遅れは6月の天候により回復し、おおむね順調である。虫害の発生がやや多い。総入荷量は、少なかった前年をかなりの程度上回ったものの、平年をわずかに下回った。 価格は、露地作が揃った下旬に落ち着き、高値で推移した前年を1割ほど下回ったものの、平年を1割以上上回った。
	なす 	群馬産を中心に栃木産、茨城産など関東産中心の入荷があった。群馬産の作付面積は、前年をやや上回った。曇雨天や夜温の低下の影響により遅延していた生育は回復し、順調であるが、虫害が散見されている。栃木産の作付面積は、前年をやや下回った。5月の強風や夜温低下による生育遅延からは回復し、おおむね順調である。虫害が散見されるが、大きな影響はない。茨城産の作付面積は前年並みで、若干の遅れはあったものの回復し順調である。総入荷量は、少なかった前年を1割以上上回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は、下旬に向け落ち着きを見せたものの、前年をやや上回り、平年を1割強上回った。
	トマト 	北海道を産中心に青森産、岩手産など東北産中心の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、生育は順調で肥大も良好である。青森産の作付面積は前年並みで、やや遅延していた生育は回復し、おおむね順調である。病虫害が散見されるも、大きな影響はない。岩手産の作付面積は前年並みで、高温の影響で生育停滞が見られる。虫害の発生が散見される。総入荷量は、少なかった前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は下旬に向けて上昇し、やや高値で推移した前年を1割以上上回り、平年を2割近く上回った。

	ピーマン 	茨城産を中心に岩手産などの入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、天候不順の影響による生育遅延からは回復したものの、一部で高温障害が散見される。岩手産の作付面積は、前年をやや上回った。日照不足・低温・強風などの影響により生育が遅延し、その後は回復傾向も、一部で尻腐れ病などの病虫害も散見される。総入荷量は、前年、平年ともに1割以上下回った。 価格は、中旬以降上昇し、前年を3割ほど上回り、平年を2割以上上回った。
土物類	さといも 	鹿児島産を中心の入荷があった。作付面積は前年並みで、降雨の影響により遅延していた収穫作業は、梅雨明け以降進展し、収穫が一時的に増加したものの、数量は多くない。病害が散見される。後続の千葉産の作付面積は減少したが、定植後の生育は良好である。輸入の中国産については、前年を5割以上下回った。総入荷量は、大幅に少なかった前年を3割近く下回り、平年を5割近く下回った。 価格は、絶対数不足から堅調推移となり、下旬に上昇し、高値で推移した前年を1割以上上回り、平年を2割以上上回った。
	ばれいしょ 	茨城産、静岡産を中心に長崎産などの入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、生育は順調である。静岡産の作付面積は前年並みで、やや小玉傾向であったが回復し、生育はおおむね順調である。長崎産の作付面積は前年並みで、生育は順調ながら遅延も見られ、残量は多い。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回ったものの、平年を1割近く下回った。 価格は、九州産の残量が多く、下旬に上昇したものの、暴騰とも言える高値だった前年を5割以上下回り、平年を4割ほど下回った。
	たまねぎ 	兵庫産、佐賀産を中心の入荷があった。兵庫産の作付面積は前年並みで、収穫は終了した。適度な降雨と気温上昇により、生育はおおむね順調であった。佐賀産の作付面積は前年並みで、収穫を終了した。定植後の低温・乾燥の影響による生育遅延からは回復し、品質も良好である。後続の北海道産の作付面積は前年並みで、生育は順調である。輸入の中国産は、前年を5割以上下回ったが、ニュージーランド産が2倍以上に増加している。総入荷量は、少なかった前年を2割近く上回り、前年をやや上回った。 価格は、高値で推移した前年を3割近く下回り、平年を1割強下回った。

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、
入荷量は3万4716トン、前年同月比100.8%、

価格は1キログラム当たり264円、同98.5%
となった(表3)。
品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(7月速報)

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	34,716	100.8	94.2	264	98.5	109.2	257	268	267
だいこん	2,455	91.9	86.7	110	125.0	110.1	114	117	101
にんじん	2,035	90.6	91.9	211	115.9	118.4	187	232	214
はくさい	2,765	111.2	100.1	70	78.7	87.5	70	73	67
キャベツ類	5,076	102.3	96.9	85	100.0	95.6	90	85	81
ほうれんそう	286	90.2	80.3	842	106.7	116.0	805	847	872
ねぎ	665	105.6	67.4	492	103.1	99.5	475	516	483
レタス類	2,391	124.6	110.1	137	91.9	99.5	134	139	139
きゅうり	1,810	113.0	100.5	342	85.1	112.2	364	345	322
なす	1,030	130.4	108.6	354	96.2	110.8	348	346	366
トマト	2,272	107.1	103.8	396	107.6	113.4	370	398	413
ピーマン	651	105.7	109.0	501	114.1	121.3	479	511	512
さといも	24	85.7	68.6	513	107.1	114.0	441	503	607
ばれいしょ	1,630	93.1	82.2	109	38.4	52.7	78	94	153
たまねぎ	3,802	85.2	85.2	123	72.4	91.8	121	121	128

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注1：平年比は過去5カ年（令和2～6年）平均との比較
注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

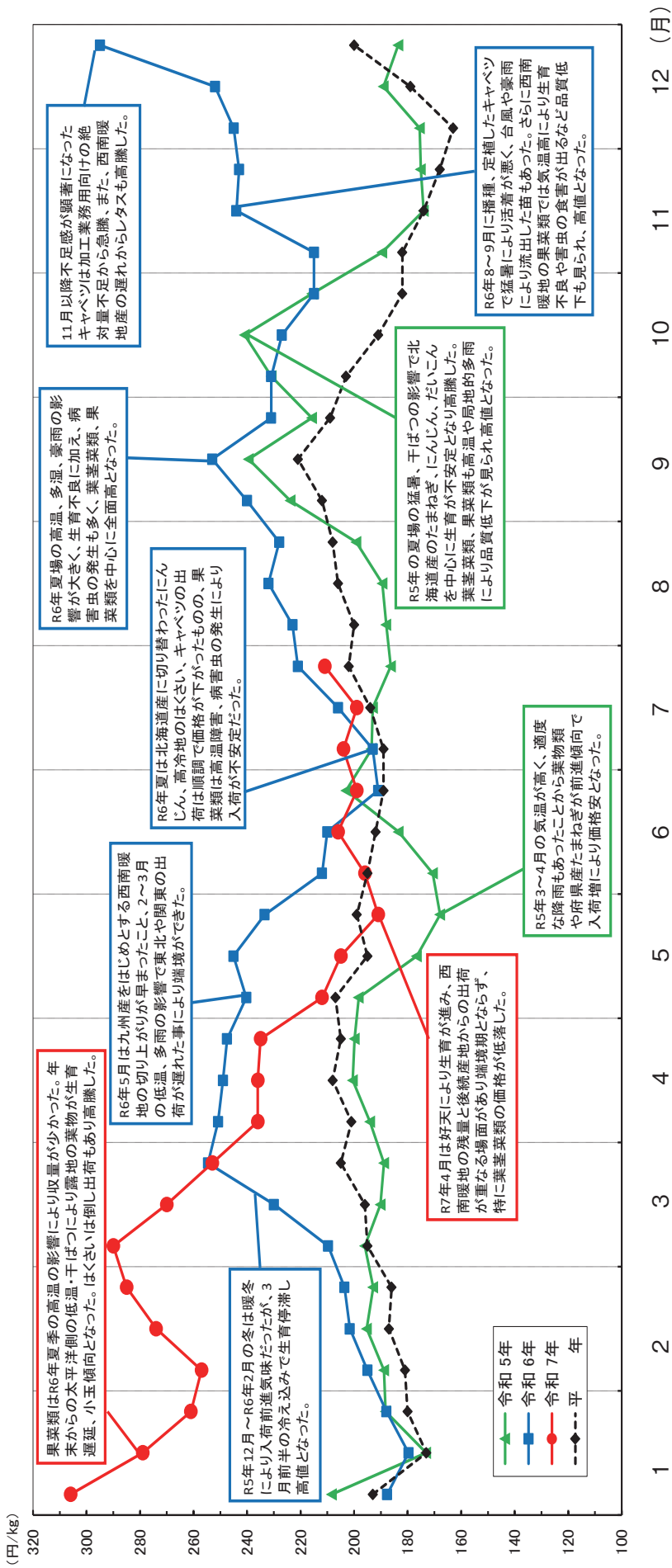
表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中心卸売市場）

類別	品目	7月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	北海道産が中心となり、青森産や岐阜産の入荷があった。各産地とも極端な気温高と干ばつで作柄が悪く、産地出荷量が少ない状況が続いた。太物が少ないため入荷量も少なく、北海道産と岐阜産の月間の入荷量は、少なかった前年をかなり下回った。月間入荷量は、前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は、太物が少なくLサイズ中心となったことで単価高となり、入荷量が少ないこともあり、月間では前年を2割以上上回り、平年を1割程度上回った。
	にんじん 	青森産と北海道産が主体となる入荷であった。気温高と干ばつの影響で生育状況は悪く、北海道産は生育遅れもあり、産地出荷量が少ない状況が続いた。月の前半は和歌山産の残量入荷もあったが切り上がり、中旬に端境となったこともあり入荷量は伸びなかった。単価高と品薄感から業務用関係では輸入の中国産の需要が高まり、中国産の入荷量は旬を追うごとに増加し、月間では前年を大きく上回った。月間入荷量は、前年、平年ともにかなりの程度下回った。 価格は、品薄感から高値で推移し、中旬に高騰した。月間では前年、平年ともに大幅に上回った。
葉茎菜類	はくさい 	長野産の入荷であった。気温高と干ばつの影響はあったものの、県内各産地とも比較的潤沢な収穫が続いた。極端な気温高で引き合いが弱く、産地では出荷調整があったため、入荷量は伸び悩んだ。月間入荷量は、前年を1割以上上回ったが、平年並みであった。 価格は、極端な気温高により消費が伸びず、安値で推移した。月間では、前年を2割以上下回り、平年を1割以上下回った。
	キャベツ類 	群馬産が中心となり、長野産も主体となる入荷であった。群馬産は出遅れから月の前半の入荷量は伸び悩んだが、旬を追うごとに入荷増量となり、大玉傾向も手伝って月の後半は順調な入荷となった。長野産は早出し産地の出荷量減により、旬を追うごとに入荷量が減少した。前年の入荷量が少なかったため、月間の入荷量は前年をわずかに上回ったが、平年をやや下回った。 価格は、前年並みであったが、平年をやや下回った。
	ほうれんそう 	岐阜産が中心となる入荷であった。生育良好で産地出荷量は安定していたが、引き合いが強い中で単価高となり、他産地からの入荷がほとんどなかったことから競争が激しくなり、入荷は伸び悩んだ。月間の入荷量は前年を1割近く下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、量販店を中心に引き合いが強かったことから堅調に推移し、旬を追うごとに上昇した。月間では前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。
	ねぎ（白ねぎ） 	鳥取産と茨城産が主体となり、下旬からは後続の長野産や北海道産の入荷も始まった。各地とも潤沢な出荷が続き、産地の移行もスムーズで、全旬を通じて安定した入荷が続いた。月間の入荷量は、前年を大きく上回った。 極端な気温高により需要がなく販売には苦戦し、月間の価格は前年を下回った。
	ねぎ（青ねぎ） 	青ねぎは徳島産や香川産が主体となり、小ねぎは高知産と静岡産が主体となる入荷であった。各地とも極端な気温高で生育が悪く、品質低下も見られて産地出荷量は伸び悩んだ。月間の入荷量は前年を下回った。 入荷量が伸びない中でも需要は伸び悩み、販売に苦戦したが、月間の価格は前年をやや上回った。
	レタス類 	玉レタスは長野産の入荷であった。安定して順調な産地出荷が続き、全旬を通じて潤沢な入荷となった。月間の入荷量は、前年をやや上回った。サニーレタスは、長野産が、生育順調で安定した入荷となり、旬を追うごとに入荷増量となった。リーフレタスも長野産で、生育順調で出荷量は多く、潤沢な入荷が続き、月間では前年を大幅に上回った。レタス類全体の月間入荷量は、前年を2割以上上回り、平年を1割程度上回った。レタス類全般が入荷増量となった一方で、なかなか引き合いが強まらず、販売には苦戦した。 価格は前年をかなりの程度下回ったが、平年並みであった。

果菜類	きゅうり 	福島産が中心となり、北海道産や長野産などの入荷があった。各地とも生育は順調で、福島産や長野産は旬を追うごとに入荷増量となった。月間入荷量は、少なかった前年をかなり大きく上回ったが、平年並みであった。他方、引き合いが弱く販売には苦戦した。 価格は、高値だった前年をかなり大きく下回ったが、平年を1割以上上回った。
	なす 	千両系は、群馬産を中心に京都産などの入荷があった。長なすは、愛媛産が中心となる入荷であった。各地とも生育が良く潤沢な産地出荷となり、主産地は全旬を通じて入荷量が多い状況が続いた。群馬産の月間入荷量は前年の3倍以上、京都産や愛媛産も前年を大きく上回った。月間入荷量は、前年を3割以上上回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は、気温が高く一定の需要もあり、前捌きが良かったため、入荷量が多い中でも値崩れなく安定して推移した。月間では高値だった前年をやや下回ったが、平年を1割程度上回った。
	トマト 	岐阜産を中心に、熊本産、愛知産が主体となる入荷であった。中旬以降は後続の岡山産などの入荷もあった。後続産地の夏秋トマトは、着色遅れから上中旬の入荷量が伸び悩み、春産地は切り上がりが早かったため、中旬に端境となり、全体の入荷量も伸び悩んだ。月間入荷量は、前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。 価格は、気温高で需要が高く引き合いも強かったため、旬を追うごとに上昇した。月間では前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。
	ピーマン 	宮崎産を中心に、茨城産や高知産の残量が入荷し、後続の愛媛産などの入荷があった。愛媛産の出遅れから全体としては中旬以降の入荷量が減少したが、月間入荷量は、前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。 気温が高く引き合いがある中で、後続産地の出遅れから品薄感が生じ、価格は旬を追うごとに上昇した。月間では前年を1割以上上回り、平年を2割以上上回った。
土物類	さといも 	鹿児島産が中心となる入荷であった。前月に引き続き、新産地の離島ものの入荷が上旬まであり、入荷増量となったが、後続産地の入荷がなく、月の後半は極端に少ない状況となった。業務用関係では、国産の入荷量の極端な少なさから、輸入の中国産を中心とした販売となり、中国産の月間入荷量は、前年の1.5倍以上となった。月間入荷量は、前年を1割以上下回り、平年を3割以上下回った。 価格は、前月の高値疲れから下落したが、国産の入荷減量に伴い、旬を追うごとに上昇した。月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年を1割以上上回った。
	ばれいしょ 	丸芋は、長崎産の残量と後続の茨城産が主体となる入荷であった。茨城産は生育遅れに加えて作柄が悪く、産地出荷量が少ない状況となった。月間入荷量は、前年を大幅に下回った。メークインは、長崎産が中心となる入荷で産地残量が多く、前年を大幅に上回った。ばれいしょ全体の月間入荷量は、前年をかなりの程度下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、丸芋、メークインとも品質低下が見られたことから、上・中旬は安値で推移し、月間では極端に高値となった前年を6割以上下回り、平年を5割近く下回った。
	たまねぎ 	兵庫産が中心となる入荷であった。天候不順からの収穫遅れにより、JAや集荷業者への生産者の持ち込みが少なく、厳しい在庫状況の中での出荷となり、全旬を通じて入荷量が少なかった。サイズは、2L、Lが中心となる大玉傾向であったが、月間入荷量は、前年、平年ともにかなり大きく下回った。 価格は、大玉傾向であったことも影響し、高値であった前年を3割近く下回り、平年を1割近く下回った。

(執筆：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位:円/kg)

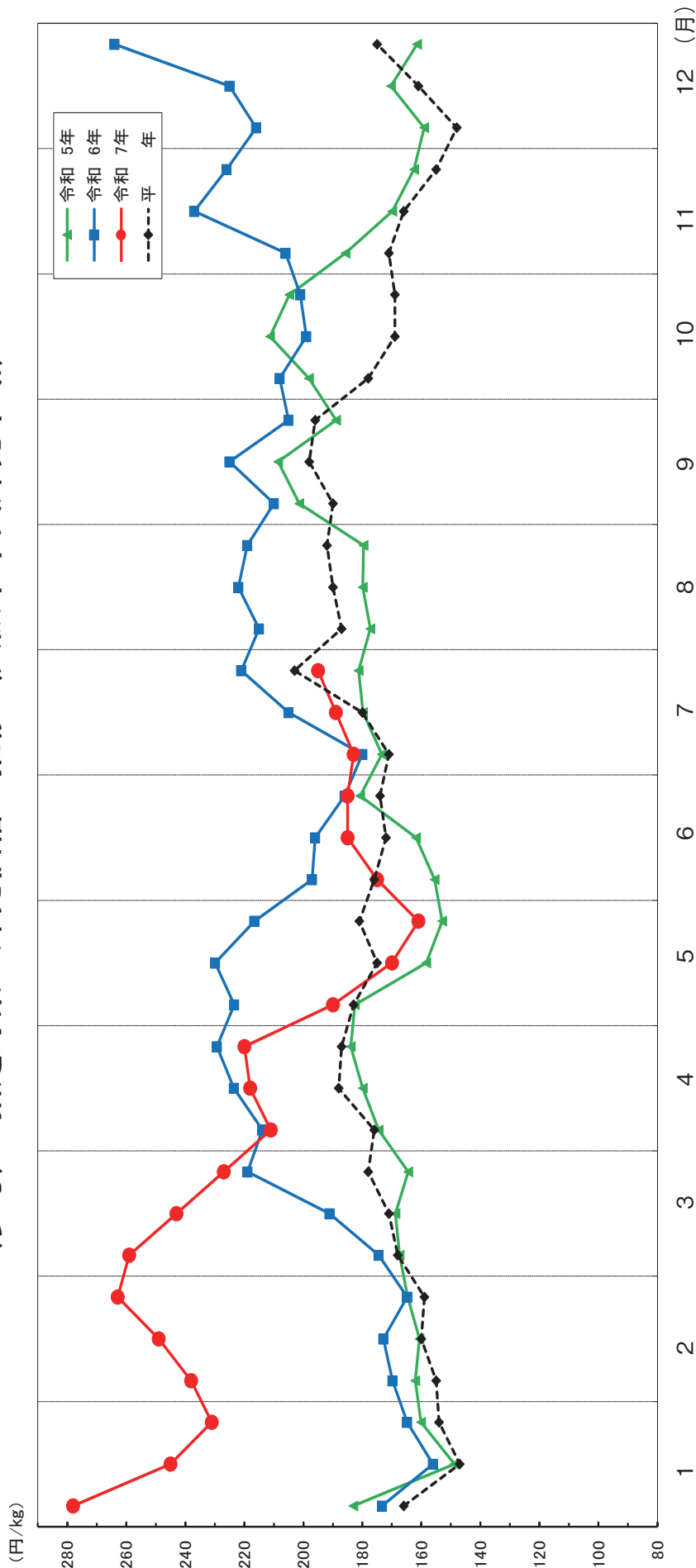
	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬			
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	175	189	184
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215	215	244	243	245	252	295
令和7年	306	279	261	257	274	285	290	270	253	236	236	235	212	205	191	196	206	199	204	199	211															
平 年	193	173	180	181	187	186	195	196	205	201	208	205	207	195	199	195	192	189	189	194	202	200	206	208	212	221	209	203	191	192	182	174	168	163	179	200

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（令和2年～6年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	180
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210
令和7年	278	245	231	238	249	263	259	243	227	211	218	220	190	170	161	175	185	185	183	189	195				
平	166	147	154	155	160	159	168	171	178	176	188	187	183	175	181	176	172	174	171	180	203	187	190	192	190

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和2年～6年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。